

## JF 日本語教育スタンダードをコースデザインに利用する

### —Can-do を取り入れたコースの目標設定—

古川 嘉子（国際交流基金日本語国際センター専任講師）

#### 0. JF 日本語教育スタンダード

JF 日本語教育スタンダード（以下、JF スタンダード）は、国際交流基金が「相互理解のための日本語」という理念のもと 2005 年より開発し、2010 年に発表した日本語の教え方、学び方、学習成果の評価のし方を考えるためのツールです。今回の研修会では、JF スタンダードの概要を理解していただき、台湾の日本語教育現場でのコースデザインへの利用を考えていただくためのワークを行いました。参加された先生方は熱心にワークに取り組んでいらっしゃいました。以下、セミナーの概要を報告します。

#### 1. 背景：スライド 3～5

グローバル化し、多様化している社会の中での言語教育では、広く言語や教育の見方を共有するために、JF スタンダードが開発の際に参考にした CEFR（Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment）をはじめとする、スタンダード、フレームワーク、枠組みの構築が行われてきました。そして、近年、日本語教育においても、学習者数が増加し、様々な地域で、様々な目的や対象の日本語教育が広く展開されている現在、共有化できる枠組みを探ろうという動きが出てきました。そのような背景から JF スタンダードの開発がはじまりました。

#### 2. JF 日本語教育スタンダードの概要：スライド 6～11

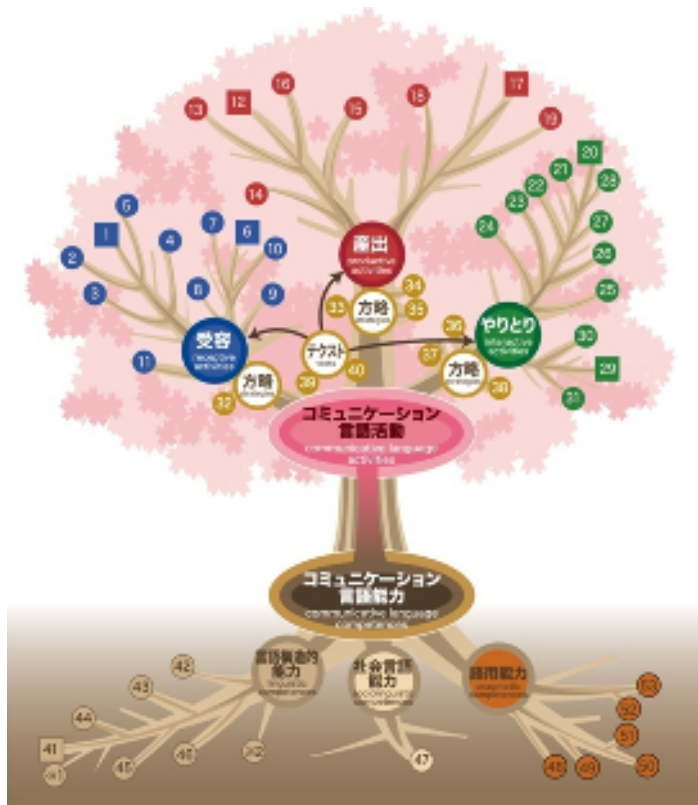
JF スタンダードは簡単に言えば、日本語の教え方、学び方、学習成果の評価のし方を考えるためのツールです。研修会では、2010 年 3 月に発表された『JF 日本語教育スタンダード 2010』を参考にして、JF スタンダードのポイントを紹介しました。JF 日本語教育スタンダードでは、価値観が多様化し、人と人との接触や交流が拡大していく現代社会においては、言葉によるコミュニケーションの重要性がますます高まっている中で、言葉を通じた相互理解のために、その言語を使って何がどのようにできるかという課題遂行能力と、さまざまな文化に触れることで視野を広げ他者の文化を理解し尊重するかという異文化理解能力が重要としています。そして、これらの能力の育成と学習成果の評価の形として「ポートフォリオ」を提案しています。

JF スタンダードは、教育現場で教育を具体的にサポートするためのツールですが、日本語教育で利用できるツールには、日本語教育の現場において、多様な学習者のニーズや学習環境に応じて柔軟に活用できることが求められます。研修会では、特に課題遂行能力に焦点をあてて、「JF スタンダードの木」、「Can-do」を取り上げました。

#### 3. JF スタンダードの木 — JF 日本語教育スタンダードのコミュニケーション観：

スライド 12～22

「JF スタンダードの木」は、言語によるコミュニケーションを、言語能力と言語活動の関係でとらえ、一本の木で表現したものです。これは、学習者の課題遂行能力の向上を図る教育を行うために、CEFR のコミュニケーション言語能力(communicative language competences)とコミュニケーション言語活動(communicative language activities)の構成を整理したものです。言語によるコミュニケ



ーションのためには基礎となる言語能力が必要で、この言語能力を使って、さまざまな言語活動を行うことができると考えます。実際のコミュニケーションでは、異文化理解能力や学習能力などの能力や、様々な知識や経験が必要となってコミュニケーションの課題を遂行していきますが、ここでは、言語に関する能力と言語活動を整理しています。

コミュニケーション言語能力は、木の根として表現され言語によるコミュニケーションを支えるものです。言語構造的な能力 (linguistic competences : 語彙・文法・発音・文字・表記など)、社会言語能力 (sociolinguistic competences : 相手との関係や場面に応じた適切さ)、語用能力 (pragmatic competences : ディスコース (談話) の組み立てや流暢さ、正確さ など) に分かれています。

コミュニケーション言語活動は、言語能力を基盤として木の枝のように広がり、多様性があるものです。受容的活動 (受容 : 読む・聞くなど)、産出活動 (産出 : 一人で長く話す・書くなど)、相互行為活動 (やりとり : 会話や手紙のやりとりなど) の大きな3つの活動の分類のほか、テキストに関する言語活動 (テキスト : メモとりやノートとり、要約など)、コミュニケーション方略 (方略 : 表現方法を考える、モニターする、推測する発言権をとるなど) が示されています。

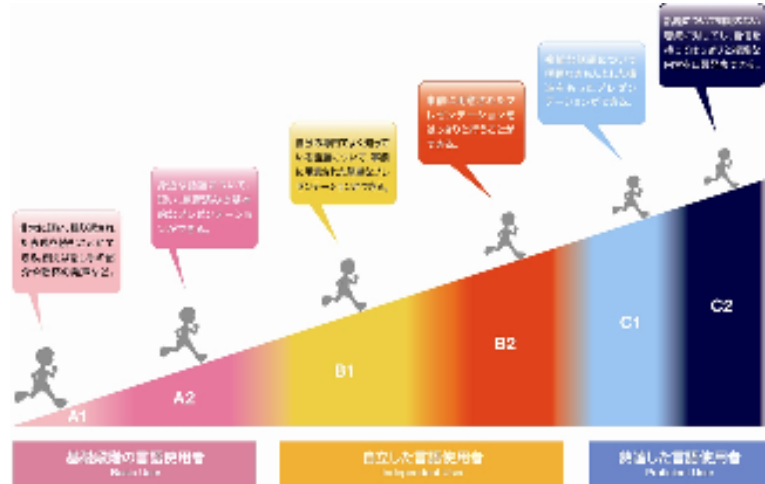
「JF スタンダードの木」では、1つ1つの枝や根で53のカテゴリー表しています。それぞれのカテゴリーの下に、言語能力の構成要素と詳細な言語活動の Can-do が示されています。木の図で表しているように、言語の熟達を示すうえで、言語能力、言語活動は互いに関連しあっています。たとえば、【16 講演やプレゼンテーションをする】という言語活動を考えてみると、言語能力としては、語彙や文法に関する能力やディスコース能力などが必要となり、表現方法を考える、自分の発話をモニターする、などの方略を使うことによって、言語活動をより効果的に行うことができます。

日本語教育の現場では、「JF スタンダードの木」を活用して、ターゲットとなる学習者に必要な言語活動を考えたり、その言語活動を行うために必要な言語能力のカテゴリーはどれかを考えながら学習目標を検討できます。さらに、「JF スタンダードの木」の根や枝のどの部分を学習する必要があるかを考えることによって、学習目的に応じた学習方針を組み立てることができます。研修会では、参加者の先生方に担当している科目を一つ思い浮かべてもらい、その科目の中でどんな言語活動や言語能力を扱っているかを「JF スタンダードの木」を見ながら考えてもらいました。そして隣の人のものと比べてみると、おもしろいディスカッションが行われていました。たとえば、「読解」のコースでは、「受容」のカテゴリーの活動が中心だが、ディスカッションを日本語で行うなど「やりとり」の活動も行っている、などの発見があったようです。

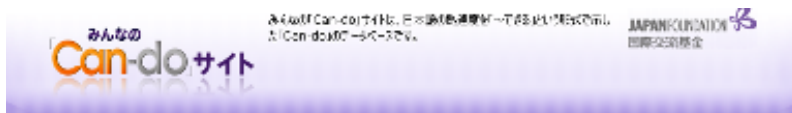
#### 4. 「Can-do」：スライド 22～36

「Can-do」とは、CEFRの言語熟達度の考え方にもとづき、日本語の熟達度を「～できる」という形式で示した文です。この「Can-do」を利用することには、①日本語の熟達度を客観的に把握できる、②学習の目標を明確にすることができる、③熟達度を学習の評価に利用できる、④熟達度や目標を他の人や他の機関と共有できる、などの利点があります。

「Can-do」には、CEFRに基づき6つのレベル（A1、A2、B1、B2、C1、C2）があります。6レベルの大まかなイメージをつかむにはCEFRの共通参照レベルの「全体的な尺度」（『JF日本語教育スタンダード 2010 ガイドブック』（以下、『ガイドブック』（p.9）が、技能別のレベルを確認するには「自己評価表」（『ガイドブック』参考資料 p.70～71）が役に立ちます。研修会では、レベルを明記していない「Can-do」が、それぞれどのレベルのものか当てるワークをしました。



次に、「Can-do」の種類ですが、「能力 Can-do」、「活動 Can-do」、「テキスト Can-do」、「方略 Can-do」の4種類に分けられます。「能力 Can-do」は、言語活動を行うために必要な言語能力を、「活動 Can-do」実社会で行う具体的な活動を、「テキスト Can-do」はノート取りや要約など、まとめたり言いかえたりする言語活動を、「方略 Can-do」言語活動を行うために言語能力をどのように活用したらよいかの方略をそれぞれ例示しています。研修会では、いくつかの「Can-do」がどの種類か考えました。その後、「Can-do」を利用して目標や授業活動の設計、評価方法の開発を行っている国際交流基金の関係機関の様々な取り組みを紹介しました。



最後に、これらの「Can-do」を提供している「みんなの「Can-do」サイト」の利用方法を紹介しました。現在、みんなの「Can-do」サイトで提供中の「Can-do」は、CEFRが提供する上記の4種類のCEFR Can-do (493)に加え、15のトピックを付与し、日本語の使用場面を想定し、日本語での具体的な言語活動を例示するために基金が独自に作成した JF Can-do (A1・A2・B1・B2、342)を提供しています。

「みんなの「Can-do」サイト」は、コースデザイン、授業設計、

教材開発など、「Can-do」を使った日本語教育実践をサポートします。研修会では、コースデザインの際の目標設定の際に必要な「Can-do」の検索のしかたや、選んだ「Can-do」や自分で作成した My Can-do をエクセルに吐き出す方法などを紹介しました。

## 5. まとめ：スライド 37

研修会の最後に、JF スタンダードを台湾の日本語教育現場でどのように利用できるかについて、考えました。参加された方々からは、特に、読解や聴解、会話などの技能の授業の目標設定や授業設計、評価で利用できるというコメントを多くいただきました。

どの会場もたいへん多くの先生方が参加され、途中のワークも隣近所の人たちと活発に行われていたのが印象的でした。ぜひ「JF スタンダードの木」を使ってどんなコミュニケーション活動をコースの中で扱うか考えたり、「みんなの「Can-do」サイト」にアクセスし、自分の教育現場で使えそうな「Can-do」を探してみたりすることから初めてみてください。そして、「JF スタンダードの木」や「Can-do」を使って、職場の同僚などほかの先生方と、日本語教育について様々な情報交換をしてみてください。そのような中から、台湾の現実に適した、より豊かな日本語教育の実践が生まれてくることを望んでいます。

### <参考文献>

国際交流基金（2009）『JF 日本語教育スタンダード 試行版』

塩澤真季・島田徳子・石司えり・小松知子・金孝卿・渡辺愛・西森年寿（2009）「Can-do を活用した日本語教育支援ツールの設計」『日本教育工学会第 25 回全国大会講演論文集』, 717-718

塩澤真季・石司えり・島田徳子（2010）「言語能力の熟達度を表す Can-do 記述の分析—JF Can-do 作成のためのガイドライン策定に向けて—」『国際交流基金 日本語教育紀要』第 6 号, 23-39

島田徳子（2010）「国際交流基金レポート 8 JF 日本語教育スタンダード ～第 2 回 JF 日本語教育スタンダードの内容と活用方法～」『日本語学』7 月号, 明治書院

島田徳子・古川嘉子・三原龍志・塩澤真季・亀山知美・真鍋一史・伊東祐郎・平高史也・中原淳（2008）「CEFR 能力記述文に基づいた日本語能力記述の検討」『日本教育工学会第 24 回全国大会講演論文集』, 595-596

関崎友愛・古川嘉子・三原龍志（2011）「評価基準と評価シートによる口頭発表の評価—JF 日本語教育スタンダードを利用して」『国際交流基金日本語教育紀要』第 7 号 pp. 119-133

内藤満・稲葉和栄・古川嘉子（2011）「国際交流基金レポート 16：ノンネイティブ日本語教師研修における上級日本語教育の課題—海外日本語教師短期研修の実践から—」『日本語学』2011 年 3 月号

吉島茂・大橋理枝（訳・編）, Council of Europe（著）（2008）『外国語教育Ⅱ—外国語の学習, 教授, 評価のためのヨーロッパ共通参照枠—』初版第 2 刷, 朝日出版社

### <関連ウェブサイト>

◆JF 日本語教育スタンダード ウェブサイト <http://jfstandard.jp>

◆みんなの「Can-do」サイト <http://jfstandard.jp/cando>